

氏 名	室 谷 誠 一
	むろ たに せい いち
学 位 の 種 類	工 学 博 士
学 位 記 番 号	論 工 博 第 1056 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 53 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	建築的空間と形態の研究 —日本近世住宅の場合—

論文調査委員 (主査) 教授 増田友也 教授 川上 貢 教授 西川幸治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は日本近世住宅をその空間と形態との両側面から捉えて、その論理的形成過程を考察し、空間についてはその構成を、形態に関してはその意味を主題とするものである。

関1章、書院造の空間と形態においては、まず書院造成立の前提となる寝殿造と比較する場合の一般特性を述べ、その多様の平面構成から基本となるべき6類型を抽出し、第2に室空間を構成する壁面ゆか面、天井面、それからとりわけ重要な構成要素である床、棚、付書院、帳台構をとりあげ、その意匠上の特性を解明し、さらに全体としての空間構成の諸形式を類別し、寝殿造の特色を遺存する初期的なもの、飾金具や障壁画によって装飾化されたもの、数寄屋化されたものなどの6類型に分けそれぞれの特性を明らかにし、第3に床、棚、書院の組合わせ方式について、その単純な原型とみられるものから複合的なものまでの諸要素の構成について類型化し、それらの範例を15C. から 17C. にかけての実例につき、典型的特性とその過程的变化を開示する。

第II章、数寄屋造の空間と形態では、まず江戸初期における「数寄屋」が茶の湯の「座敷」や「茶屋」とは異なることを解説し、第2に「すき」の意味に、文雅或は風流に心を寄せる世界と、茶の湯を嗜む世界とがあり、後者には栄華と閑寂の世界を対極として、互に他を媒介としていることを述べ、第3に「数寄屋造」の一祖型としての茶屋的なものの本質を湘南亭、月波楼、松琴亭の空間と形態について考察し、第4に「数寄屋造」の特性を、基本的には草庵、茶屋、農家、広間、書院の4祖型とそれらの系譜によって捉え、さらに表現上の特性をその素材、形態、空間の各面から論考する。

第III章、茶屋の成立と空間では、第1に利休に到って完成された「わび」の茶室の背景に、まず喫茶のあり方として、禅院における喫茶の風習と茶礼、「君台観左右帳記」などに見られる書院の茶、独座観想の茶、庶民生活の中に普及した茶などがあり、喫茶の場所の全体像としては、四畳半の小座敷、隠遁者の草庵、庶民の住居などがあり、さらに思想的背景として、唐物趣味、冷え枯れ、「わび」の美意識、禅の思想などのあることを解説している。第2には茶室のあり方に内・外空間の連関から見た4類

型のあることを示し、その空間構成が茶室の全体における床と点前座との位置関係が基本になるとし、それを類型化し、諸実例についてそれぞれの特性を論考している。第3には表現の手法としての簡略化と縮小化、対極性とその統合性、カネワリなどについて述べ、さらに室内の構成要素のうち特に窓と中柱についてその重合的な表現上の意味を分析している。

第IV章、農村住宅の空間と形態においては、その本来的な空間と形態とについて考察する。まず空間の構成が領域的形成、序列的形成、室的形成をなしていること、第2に実体的な建築として造形された形態については、骨組、囲い、覆いの諸相があること、第3に平面と架構の類型とその空間的形成の特性についてそれらが疎遠な相関をもつこと、第4にその類型をとりわけ滋賀県下での調査資料にもとづいて具体的に考究している。

第V章、都市住宅の類型一彦根の場合一では、近世城下町の住宅遺構の調査資料にもとづき、町を構成している一般の町家、港の近くにある水運業者と水軍の住宅、武家屋敷、足輕屋敷、ならびに周辺農家をも併せ比較研究し、その基本的諸形式を示し、特に足輕屋敷に見られる諸平面型が他の4型式の住宅にみられる平面型とどのように関連するかを明らかにしている。

結語においてこれらの研究の横断的綜括を行い、本来公家住宅として成立した書院造が、近世の平均的武家住宅へと移行する際での数寄屋風様式化、さらには町家への浸透を経ての農家等への影響を解明する。一方その町家が本来的には原型的農家とその軌を一にしながらも、その平面構成においては、既にして書院造の成立に前後する時期での平安京の王朝末期以降に見うる市町の棚（店）屋を祖型とするものであるとし、また近世農家においてはこれらのすべての空間的構成の交錯の上に素朴に形成されたものであることを論述している。そうして伝統のそのような交錯的受容が、単に数寄屋造の形成に見うるのみならず、近世住宅一般の空間構成の根底をなしていることを論証する。

論文審査の結果の要旨

本論文は日本近世住宅の諸形式の具体的分析的研究であって、それを通じて日本住宅一般の空間的構成原理を解明しようとするものであり、その研究の方法として近世住宅の基本的な空間と形態についてそれぞれの構成型を model 化しつつ、その特性、成立の背景と形成原理、さらには表現の意味などを考察している。得られた成果の主要なものは次の通りである。

(1)一般に書院造と呼ばれている様式の特徴について、その平面構成に基本的な6類型が認められるとし、さらに壁面、床、棚、付書院、天井などによって形成される室構成にも、初期的なものから整備されたものにいたる多様の変化のうちに6類型があるとする。さらにそれらの諸類型が公的な格式を示すものと、簡素でくだけた数寄屋風様式をも示すものとに大別できるとし、その総体的な類型化を提案している。

(2)書院造の室の構成要素である床、棚、書院の組合わせには多くの構成型が見られるが、それらの主室とそれに属する小室（副室）とが一体をなすものとして捉えることによって構成要素とそれぞれの構成型を論理的に model 化し、いずれも実例と照合しつつその特性を明らかにし、さらにそれらの諸 model の組合わせにも祖型（基本型）、一般型、結合型の3形式のあることを明らかにしている。

(3)数寄屋造の祖型が草庵、茶屋、農家、広間、書院などにわたることを論考し、その様式的成立の背景を分析するとともに、その表現が、素材的、形態的、空間的であるとし、とりわけそれが非限定的であり象徴的であることを解明している。

(4)多様な茶室のあり方には、基本的に室内外とのかかわり方においてその本質を示すものとして、それを4類型に分類し、さらに茶室の室内空間が、客座、点前座を基礎とし、床、中柱、壁、入口、窓、天井などの形状や配置によってその類型が形成されるが、そのうちとりわけ床と点前座との位置的相互関係が重要であり、それと室の平面との組合わせによって7類型が見出しうるとし、特に点前座が床に向って右にある長三畳、二畳合目の形式がもっとも一般的であり、それらを短縮、拡大したものが見られる諸形式がそれに次ぐことから、茶室にとって空間構成が即物性を超える意味として統べられていることを明らかにする。

(5)茶室のそのような表現手法には、基本型を下敷とする簡略化と縮小、対極性とその統合、後にはカネワリ（法式）などもあることを論考し、室表現としての面では、窓と中柱のようにそれ自身実在性を超える表現上の効果による意味の層のあることが分析されている。

(6)農村住宅の全体的構成には、領域的形成、序列的形成、室的形成の3基本型があり、全体はそれらの複合されたものであるとして、それぞれの祖型的特性を明らかにする。

(7)これらの類型的分析結果を利用しつつ、滋賀県下における農家調査から、その架構形式と空間構成との間に町家に見られるような相即関係の稀薄な点に着目し、そこから本来的な農家の平面形式を土間とうちの構成として分析的に見出している。ざしきはそれに付加された書院造的もしくは町家的要素にほかならぬとする。

(8)彦根に見る町家の通りにわと畳床との構成は、王朝末期の平安京の市町の棚（店）屋にその系譜を引くものであって、それが数寄屋化された書院造の影響下にあることを解明している。

(9)彦根城下の足軽屋敷こそもっとも一般的な意味での近世都市住宅の典型であるとし、その多様な平面形式を整理し分析することによって、そこに農家的原型と町家的原型の総合を解明している。

(10)それら以外の住宅の型すなわち、周辺農家、中級武家屋敷、湖上交通に関係する特定の商家あるいは水軍の住宅などについても同様に比較し分析を加え、そこに混合的総合の空間構成を見出している。

以上要するに本論文は日本近世住宅の形式や内容に関して、その成立過程について論じたもので、これは史学的変遷としてよりも、その形成、創造の側から構造分析的に解明しようとするものであり、そのために構成や様式について分析的に類型化を行い、さらにそれらの意味の層をも明らかにするものであって、建築学上、実践上重要な寄与をなすものである。

よって、本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。